

CAMK コレクション vol. 6

「きっかけは「彫刻」。—現代日本の彫刻と立体造形」 関連イベント

熊本市現代美術館開館記念日×熊本城ホール開業記念

エマニュエル・ムホー アーティストトーク

日時 2019年10月12日(土) 13:00-14:00

場所 熊本市現代美術館 ホームギャラリー

講師 エマニュエル・ムホー (建築家/アーティスト/デザイナー)



CAMK コレクション vol. 6

きっかけは「彫刻」。—現代日本の彫刻と立体造形

会期 2019年9月21日(土) - 11月24日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーII

富澤 熊本市現代美術館にご来館いただき、誠にありがとうございます。本日は熊本市現代美術館の開館記念日ですので、開催中の「きっかけは「彫刻」。」展が無料で観覧いただけます。

そして明日は熊本城ホールもいよいよ開館を迎えます。本日は、その両方を祝うことを目的とし、熊本市現代美術館開館記念日×熊本城ホール開業記念のコラボ企画として、熊本城ホールに大きなインスタレーションを展示していただきました建築家／アーティスト／デザイナーのエマニュエル・ムホーさんのアーティストトークを開催いたします。

最初に、熊本城ホール担当の、熊本市新ホールマネジメント課の三池史子さんにお話をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

三池 皆さんこんにちは。本日はよろしくお願い致します。

画面を使って、明日から順次オープンしていく熊本城ホールについて簡単にご説明をさせていただきます。現代美術館から行きますと、下通、新市街とずっと歩いて行きまして、花畑公園や辛島公園の先に行きますと、前は仮バスターミナルがあったところが、今はシンボルプロムナード、現在はラグビーのワールドカップのファンゾーンになっています。

その先に大きく16万平米の再開発施設が新しく出来ました。その中に熊本城ホールが位置しております。再開発施設のシンボルプロムナードに面したところの低層部分には商業施設やシネコンがあり、高層部の南側に住宅、北側にホテルがあります。

商業等棟の屋上庭園と、その向こう側には駐車場とバンケットがありまして、屋上庭園が繋がっています。

一階部分にバスターミナルがありまして、熊本城ホールは南の西側の角に位置しております。再開発施設はとても大きいので、ちょっと分かりにくいかと思いますが、花畑公園と花畑広場があって、シンボルプロムナードの正面がエントランスになっています。そこから登ってエスカレーターで2階に移動していただきますと、大きな通路があります。そのコンコースをずっと歩いていきますと、吹き抜け空間がありまして、その交差点、コンコースが交わる場所に熊本城ホールのメインの玄関があります。

熊本城ホールは1階、2階、3階、4階と4つの様々なホールが重なって作られておりますので、順次説明していきます。

まず、1階の展示ホールですが、約1600平米で、高さが約6メートル、グランメッセの1/4くらいの大きさの展示ホールとなっております。車のモーターショーがあつたりとか、展示会とかの他にも、フリーマーケットや、明日オープンするんですけど、MAN WITH A MISSION（マン・ウィズ・ア・ミッション）というロックバンドのライブ会場になったり、いろんな使い方ができます。ここはトラックがそのまま入れるような構造になっておりますので、設営も楽に出来るようになってます。

2階にはシビックホールという多目的ホールがありまして、シアタースタイルだと、後ろの方に段々の椅子を設けまして、前の方にこのようにスタッキングチェアを並べることで750席の中規模のホールとして使うことができます。また、この、後ろの段々の席が、ここの、前まで移動してきます。真ん中を仕切ることができまして、300席くらいの小ホールとしても使うことができ

ます。更に、椅子を全部収納してしまいますと、フラットな形に使うこともできまして、展示会、ファッションショー、そういった使い方もできます。で、ここは音響の設備とか照明設備も充実しておりますので、例えばギター1本あればライブができるというような仕様になっております。

3階には会議室があります。大小様々用意しておりまして、全部で19室。これは1番大きいところ、一部屋が300平米ありまして、4つ繋げることができて、1200平米の大きな会議室として使うことができます。会議の他、試験会場、展示会、いろんな使い方もできるようになっております。

そして4階から6階がメインホールです。固定席で2300席あります。ステージも大変広くて、間口が22メートル、奥行き20メートルの広さです。ここが大きい割には、横広な作りになっておりまして、2階席の後ろからでもとても近く、市民会館よりも大きなホールです。ここの特徴が、2階席が浮いているような作りになってありまして、後ろに穴が空いているんですね。よく一階席の後ろの方は音が籠るということなんですけど、その穴があるということと、ホールが全体的にすり鉢状の形をしておりますので、音の反射を良くして全体的に音が回るような作りになっておりますので、どの席からも良い音響で楽しんでいただけるホールとなっております。

ホワイエが、屋上庭園に面したところにあります。これが屋上庭園からお城が見えるホワイエなんですけど、ここの段々の壁をイメージして、熊本城ホールのロゴを作っております。

明日から順次オープンしていくんですけど、明日が1階の展示ホールで、先程申し上げましたように、MAN WITH A MISSION (マン・ウィズ・ア・ミッション) のライブで幕開けします。来週の10月19日には会議室がオープンします。皆様のお手元に配布しております資料の、このチラシにサンタクローズ国際会議とありますが、こちらが会議室のこけら落としです。次に、10月31日のルパン三世のジャズライブがこけら落とし公演となっておりますが、その前日に、プレオープンということで、千住真理子さんと横山幸雄さんのデュオリサイタルで幕開けします。その後11月29日に開業記念式典を行いまして、12月1日にメインホールのこけら落とし公演としてグランドオープンする予定です。こちら、開業記念式典は、玉置浩二さんのコンサートがあります。今、市民公募で1500名の参加を募っております。多い場合は抽選になりますが、10月31日まで受付けておりますので、ぜひご応募ください。

そして、最後になりますが、2階が、コンコースの交わるところから入ってきて、皆様行き交われるところで、エントランスロビーとなっております。こちらは無料の空間で、バスを待つ間、ふらっと立ち寄っていただきたり、カフェとかも用意しておりますので、ちょっとくつろいでいただきたり出来るような空間にしております。

ここでロビーコンサートとか、絵画の、例えばスケッチ大会の作品展示会とか、市民の方々に利用いただけるような作りとなっております。「熊本城ホールを核とした文化の発信」というのが市長の公約にもありまして、何かしらここで、今まで熊本で出来なかった文化を発信できればということで、オープニングのインスタレーションをエマニュエル・ムホーさんにデザインしていただきまして、今回展示をすることができました。会期が明日から11月17日までです。開館時間が9時から夜10時までですので、この期間はずっと無料で開放しております。いろんな角度から見てお楽しみいただければと思います。

それではお待たせいたしました。エマニュエル・ムホーさんにご講演いただきます。

エマニュエル・ムホーさんは1996年から東京在住の、フランス出身の建築家であり、アーティストであり、デザイナーです。「エマニュエル・ムホー・アーキテクチャー+デザイン」を主宰されており、色を大胆に取り入れた建築、アートなど、多数のプロジェクトを手掛けています。現在、東北芸術工科大学の准教授も務められておられます。それではエマニュエル・ムホーさん、よろしくお願いいたします。

ムホー 三池さん、ありがとうございました。

エマニュエル・ムホーと申します。今日は来ていただいてありがとうございます。今日は台風ですが、幸いなことに昨日の便で移動していたので、無事にここに来れました。私も家が心配です。

私はフランス人で、23年間東京に住んでいます。なぜ住んでいるかという、そもそも読書が好きで、高校の時、もちろんフランス語訳だったんですけども、本当にメジャーな、夏目漱石、三島由紀夫、安部公房らの本を沢山読んで、日本の文化に興味を持っていました。当時インターネットはまだ無かったので、日本のイメージは、本を通してのイメージしか無かったです。

大学生の時は、建築の勉強をしましたが、でもずっと「東京のことを知りたい!」という気持ちもあって、自分の卒業制作のために日本と関係するテーマを選んで、その時初めて一週間、リサーチに東京に来ました。1995年の事です。それが24年前なのですが、本当に昨日の事のように覚えています。成田空港に着いて、成田空港から成田エクスプレスに乗って、初めて自分の目で日本の風景が窓から見るのが出来たんです。ずっと車窓から風景を見ていて、空港を出て10分ぐらいのところはまだ全然田んぼで、でもある瞬間に、本当にすごく鮮やかなブルーが見えたんです。一瞬の出来事でしたが、びっくりして、「自然の中になぜブルーがあるのかしら?」と思いました。よく見たら家の屋根だったんです。非常に驚きました。あんなきれいなブルーを建築物の屋根に使うのを見たことがなかったですし、自然の中にそういう色があるのを見たことがなかったので、本当に驚きました。

それで、池袋駅に着いた時も2つ目の衝撃でした。街を出た時に無数の色、無限の色が自分の目の前に広がって、その瞬間はまるで初めて色を見たかのような感覚でした。フランスで建築を習ってたんですけども、特別に色について興味があった訳でもなかったし、意識したことも特に無かったです。あまりにも美しく、沢山の色が浮いているように見えて、電車から降りて1、2時間もしないうちに、もう東京に住むと決めていました。1週間滞在して、フランスに戻って、建築家の免許を取って、その1ヶ月半後ぐらいに、本当に、スーツケースひとつで移住しました。

スライドをお見せします。フランスのパリの屋根です。空から見た写真ですが、私は東京に来るまで、ずっとフランスで生活していました。街の景観は、19世紀の街づくりで、石造りで、材料を統一していて、非常に統一感のある街並みです。そういうなかでずっと生活してきました。これはセーヌ川の街並みです。

次にお見せするのは、東京に初めて来た当時の写真です。まだデジカメではありません。当

時の池袋の看板の写真です。色に囲まれてて、純粹に美しいと思いました。自動販売機も意外と街に色を与えてるんですね。色と言ってますが、「レイヤー」つまり「重ね」には、何かすごく心を動かされました。池袋の街並みを見た時に、色が街に浮いているように見えただけですね、三次元に浮いているように見えた。それがすごく感動的でした。

これは、パリの普通の小さな道です。フランスの建物は、建物と建物がくっついて建てられています。例えば、パリで散歩しますと、必ず自分の両サイドに壁があって、サンドイッチみたいに使われているようなイメージです。パースペクティブがあって、視点がまっすぐ先に見えてて、自分の頭上に空があるというのが、根本的な構成です。

これは、日本に初めて来た当時のちょっと古い写真ですが、日本の街は、もちろん様々な理由がありますが、色んな建物が独立して建てられています。そうすると、街を見ると、違うボリュームの建物だったり、建物だけじゃなくて、看板だったり電線だったり、いろんな層、レイヤーが重なって、異なるボリュームのものが重なって、街を構成していくんです。それが、自分の体に感じた感覚ですけども、すごく好きです。

あと、この写真ではちょっと分かりづらいんですが、意識して見ていただきますと、当然いろんな隙間がありますので、いろんな隙間から空が見えるんですね。だから、日本では、空がすごく広く感じるんです。

先ほどお話しましたように、フランスで建築家の免許を取ってから、1ヶ月半後にスーツケース一つで来て、日本語もゼロから勉強したんですが、数年経ってから、自分の設計事務所、一級建築士設計事務所を開くことが出来ました。

最初に発表したのは、「色切/shikiri」というコンセプトです。造語で、読み方は「しきり」です。色で切るというコンセプトですが、その「色切」というのは、元々は日本の「仕切り」からインスパイアされています。

私は、日本の伝統的な仕切りがものすごく好きで、襖とか障子、平安時代の御簾や几帳は、日本文化の重要な要素だと考えています。区切りながら曖昧に境界線を設けて、その後ろに何かの気配を、自然や人を感じたりする、そういう風に、空間をフレキシブルに仕切る、日本の仕切りがすごく好きなんです。

日本に引っ越して、最初の頃一番驚いたのは、自分が住んでいたマンションや周りの家で、日本家屋の普通の一般住宅がどんどん壊されてしまい、次々とその後に、洋風のマンションが建てられていたことでした。

当時私は、自分で選んで気に入っていたマンションに住んでいて、普通のマンションで、中は襖とか、畳とか、完全に和風だったんです。ところがオーナーさんから、「リフォームしたいので3ヶ月だけ引っ越してね」と言われて、戻ったら洋風になっていたんです。でも、窓の高さとか、畳の座った時の目線と、椅子に座っている時とは全部違うので、やっぱり合わない。結局すぐ引っ越したんです。

そういう風に、日本の仕切りがどんどん無くなって、それがすごく悲しかったんです。そういう変化に対して、自分ではもちろん何も出来ないんですが、私は、自分が感じている、その仕

切りのエッセンスを自分なりにちょっと表現して、もっと今の世代に合うような仕切りを提案出来ると思って、「色切/shikiri」というコンセプトを発表しました。

先ほど言いましたように、「色切/shikiri」とは、色で空間を仕切る、色で空間を作る、東京の色とレイヤーから、三次元なレイヤーからインスピレーションを受けたコンセプトで、色を三次元的な要素として空間を作っていくという考え方です。

日本もヨーロッパも、どこでも同じだと思いますが、特に建築とか空間デザインの世界ですと、色と言いますと、仕上げのな、一言で言うと、かなりマイナーな要素として考えられていることが多いです。デザインプロセスの最後に、「この壁を何色にしますか?」とか、「この床は何色にしますか?」とか、「カーテンの色を何にしますか?」とか、最後の、二次元的な、仕上げのな捉え方が多いと思うんですね。私はそれがすごくもったいないと思っていて、一番根本的な、空間を作るそのものの要素として考えています。

日本語をゼロから習って、日本の一級建築士の資格を取って、事務所設立して、このコンセプトを発表したんですが、その時に決めたことが一つあります。私は、東京の街並みを見てすごくエモーションを感じて、本当に初めて色が好きになったので、東京に住むことになったからには、私は、今後、色を使って色んなデザインをして、人に色々とエモーションを感じていただきたい、と決めました。

建築の設計からちょっとした小物まで、様々な仕事を行ってきましたが、これは巣鴨信用金庫常盤台支店、東京にある信用金庫の建物です。ニックネームが「虹のミルフィーユ」です。ミルフィーユは、フランスのお菓子で、沢山の層が重なってるケーキのことですけれども、そのように色んな層が重なっているんです。

これは建築の例ですが、どのプロジェクトでも、最初に決めることは、使用する色数です。例えば、このプロジェクトですと、だいたい20色とか、50色とか、10色とか、その色数からアイデアを考えます。もちろんプロジェクトの用途だったりコンテキストだったり、他にも色々要素はあります。

巣鴨信用金庫は、24色を使っていますが、これは最初から決めていました。普通、銀行の場合、赤とかブルーとか、1つだけのカラーイメージです。ですが、巣鴨信用金庫という銀行はちょっと面白くて、理事長がすごく面白い方なんです。支店を、まちの中のひとつの休憩の場と考えてて、つまりホスピタリティが基本にあるんです。「喜ばれることに喜びを」というのが、巣鴨信用金庫のモットーで、どういう依頼を受けたかと言うと、「1分でも1秒でも長く居たい空間を作ってください」というのが理事長の依頼だったんです、それだけでした。

それで、24色にした理由はというと、1色とか2色だと、良い意味も含めて、すごく強くインパクトのあるイメージで、特徴が出るんです。24色にしたのは、カラーファミリーと呼んでいますが、イエロー、ピンク、茶色、緑、ブルー、紫の6つ、自分の中で6つのカラーファミリーがありますが、それぞれのカラーファミリーの4つの色、例えば、一番薄い黄色、中間的な黄色から、ダークな黄色までの4×6で24色。バランスが整って、優しくて、偏りがない、そういうカラーパレットにしたかったんです。

これはプロダクトの例で、家具。これは紙のおもちゃです。これはコカ・コーラのためのインスタレーション。これはユニクロ、これは 2018 年の ISSEY MIYAKE でのインスタレーションです。ちょっとした手に持てるようなものも含め、様々なデザインを手掛けていますが、私にとっては、アプローチの仕方は全く同じです。様々なスケールで、様々な異なるサイズですが、同じコンセプトで、三次元で色を重ねて、空間を作るようにしています。

次にお話したいのは、「100 colors」についてです。100 色という意味です。

2013 年に、新宿区の「新宿クリエイターズ・フェスタ」に、展示の依頼をいただきました。事務所設立の 10 周年だったこともあり、「色切 / shikiri」コンセプトをより多くの人に感じていただきたいと思っていて、そのとき発表したのが《100 colors no.1》です。その時の写真です。

これは、新宿三井ビルのエントランスのスペースで、高層ビルのエレベーターホールのすぐ前の空間だったんですが、「ここで、100 色を使って空間をつくる!」と思ったんです。私もし日本に来ていなければ、色について特に意識することも無かったことから、見に来てくださる皆さんに、是非「色」を意識していただきたいと、「色」を身体で感じていただきたいという想いがありました。普段色んな色で囲まれて生活していますが、たぶん全然気にしてないと思いますしね。

この 100 という数字は、すごく親しみのある数字だと思うんです。100 点とか 100 パーセントとか、「多い」というイメージもありますけれども、でもちゃんと 100 までは普通に数えられて、色の区別もできる数字です。それで 100 にしました。

同じ空間に 100 色がぎゅっと集合しているのはなかなか見ることがないので、自分の目線からでしたけど、自分が一番美しいと思う 100 色をつくって、その 100 色をすごくシンプルに、大きいサイズの紙を、1 枚、1 枚、レイアウトして吊って、ひとつのグラデーションをつくって、それで空間を構成しました。

写真を見ていただきますと、後ろに女性が立っていますが、インスタレーションは、かなり低い位置への設置なんです。わざと低くしました。作品の下にソファを置いて、皆さんにその色の下に、寝そべるような感じです。色を浴びてるようなイメージです。

この作品が結果として、「100 colors」シリーズの「no.1」となりましたが、最初は 1 回だけのつもりでした。でも実際に作って、設営は、簡単に見えるんですけど結構大変だったのですが、事務所の皆がこの空間に初めて入ったときに、ものすごく気持ちが良くて、本当に身体全身で色を浴びているようなイメージで、「100 colors」というコンセプトについても共有することが出来たので、この一回だけではもったいない、色んな方にこれを経験していただきたいと思って、出来る限り色んなところでやってみたいとその時決めました。2013 年から、少しずつ展開しております。

この翌年は、屋外で初めて展示しました。同じく新宿の同じイベントだったんですが、場所が新宿中央公園で、紙ではなく布を事務所で染めて、《100 colors no.3》を制作しました。屋外ですので、風の具合によって、色が全く動いてなかったりとか、すごく激しく動いたりとか、本当に色が生きてるような作品となりました。

これはすごく小さな作品です。東京の増上寺での《1坪の100色》で、一人用の空間に入って感じる作品です。これも100色で、素材は紙です。全部をととても細く、5ミリ幅で切っていて、これは全部ちなみに手切りで、事務所で皆で切ったので、すごく大変でした。

これは去年ドバイで行ったインスタレーション《ダウンタウン・ドバイ》ですが、ドバイの町の大通りがありますが、それに沿って、1キロの長さで100色のインスタレーションをやりました。町全体が変わっていくような、歩くと色がどんどん変わっていくような作品でした。これは例外的で、本当は同時に100色を見て欲しいという思いがあります、ひとつの目線で見ることが一番好きです。

今お見せしたのは、「100 colors」シリーズをすごくシンプルな形で、例えば紙の面だったり、帯だったりで表現したシリーズですが、プロジェクトによって、色の「形」を変えて行っています。

お見せしてるのは、同様に100色で空間を作っていくんですけども、これは《bunshi / 分枝》という作品で、木の分枝、木が大きくなると、枝がどんどん分かれていって成長していくというコンセプトです。写真の奥にはたくさんのお木製の家具が見えてるんですが、2016年に東京とパリで行われた Wood Furniture Japan Award（ウッド・ファニチャー・ジャパン・アワード）において、日本の職人とデザイナーがコラボして家具をつくったり、あとは名作、例えば天童木工の名作とか、そういう選定された20点の家具を展示する会場構成としてこのインスタレーションを手がけました。これは黄色から入って、まるで森の中にいるようなイメージです、導線も真っ直ぐではなくて曲線的なんです。これは、《bunshi / 分枝》のモジュールのひとつですが、全部同じモジュールを用いています。このインスタレーションですと2万ピースぐらいが、三次元に重なってます。

これも同じく「100 colors」シリーズですが、今までのインスタレーションですと、一番コンパクトなサイズで《今、ここにいるよ。》という作品です。

次に、遠くからではちょっと見づらいかもしれませんが、これがひとつのピースです。見えますか？女性のシルエットです。《銀座の中の宇宙》という企画展の中で発表した作品で、この中には、同じ女性のシルエットが、18,000人います。同じシルエットが重なり合っていることで、東京の人込みもイメージしてるし、宇宙に対峙して自分が今どこにいるのかと自身に問い直す、コンセプト的な作品です。実は、必ず、この「100 colors」シリーズの中には、いつも迷子を入れてるんです。この作品では女の子ですけども、大体三つの迷子が入ってます。もちろん皆さんによく見ていただきたいことからの、ひとつの遊び心です。

これも同じ「100 colors」シリーズですけど、ムービーで見るとクルクル動きます。《color mixing》という作品で、これはNSK日本精工という、ベアリングをつくってる非常に有名な大企業ですが、その100周年のためのインスタレーションで、私は、回ると色が回って、色が混ざって、心が動くというのをコンセプトとして作りました。

これはいつも自分が使っている100色ですが、見ていただきますと、お花のような形で、何色が混ぜてるんです。すごくアナログですが、複雑な構造となっていて、これは真上ですが、上にはサーキュレーターがついてる。サーキュレーターで風を吹かせて、風車が回って、全部クルクル回って、そうすると花の色が回ることで、混ざるんですね。絵の具を混ぜると新しい色が生ま

れると同じで、色が混色されることで、無限な色が生まれるという作品です。

2017年に、国立新美術館の10周年のためのインスタレーションの依頼を受けまして、その時発表したのは、《Forest of Numbers / 数字の森》という作品です。サイズがとにかく大きいです。美術館は普段、おそらくここも同じだと思うんですが、とても広い展示室がありますが、企画展ですと必要に応じて壁を動かしたりとか、サイズを変えたりしてますので、全部フルオープン、フルサイズで見ることはなかなかありません。この時初めて、一番広い部屋を、一番マキシマムなサイズでつかいました。この作品は、過去の10年ではなくて未来の10年、2017年から2026年までを10の層にして作った作品です。2017年から作品内を進んでいくと、どんどん年ごとに色が変わっていく作品です。

これは《COLOR OF TIME》、富山県美術館での作品です。遠くからだと何だか分からないと思うんですが、これも数字、サイズが小さめです。《COLOR OF TIME》という名前にしたのは、時間、時、時の色ですね。このインスタレーションの初日は、2017年11月16日だったんですが、その日の富山市の日の出から日没時の色が全く見えなくなる瞬間が、その日は19時49分だったんですけれども、その一日の流れを色で表現しています。実は全部時刻を描いてるんです。この日は日の出が6:30で、31分、32分、33分と、どんどん時間が過ぎていく様子を、最初はずごく淡い色で始めています。いつもの私が使っている100色のグラデーションではなく、その時の空の色と合えました。これは反対側です。初めて黒を使った作品でもあります。

これは表参道ヒルズのイルミネーション、《100色のクリスマスツリーの森》ですけれども、紙で中にLEDを入れて、紙を優しく光らせてます。

これは一番最近の作品で《ことばの宇宙》です。今年の7月は、皆さんがご存知の日本を代表する飲み物「カルピス」の100周年だったんです。私も知らなかったんですが、カルピスが生まれたのは実は七夕の日で、東京で行われた100周年を祝う「カルピス100th 七夕に会おう」展のためにインスタレーションを手がけました。七夕なので短冊のようなインスタレーションのご依頼だったんですが、短冊そのものではなく、短冊に願い事を書いてお願いすることにフォーカスして、その媒体の紙ではなく、その言葉にフォーカスしました。外国人でも子供でも、みんなが一番読めるひらがなを選んで、そういうひらがなで出来ている大きい空間をつくりました。たくさんのひらがなの中を歩いているようなイメージです。会場のアーツ千代田3331は若干複雑な空間でして、トンネルをくぐりながら、隣に連続する部屋に入りますと、ここでは、100色のカルピスのボトルに、100個の言葉を100色で展示されていて、その言葉は、人と人との関係性を表す言葉、例えば「しんゆう」とか「らぶらぶ」とかにしました。



最後に、今回の熊本でのインスタレーションについてお話をさせていただきます。

先ほど、三池さんからご紹介いただいた通り、熊本城ホールオープニングのためのインスタレーションの依頼を受けました。すごく面白い空間で、とにかく広い。天井が高い。9メートルものなかなかの高さです。これはそのエントランスロビーのイメージです。

新作の作品名は《数字の森 | 2019 - 2118》です。その100年を100色で、明るい未来に向けてのメッセージとして制作しました。100列ありまして、黄色からスタートして色が変わっていくんですけども、同時に年も変わっていきます。2019、2020、2021、2022、エトセトラエトセトラ。その未来の100年をイメージする作品です。作品は天井から吊ってあるので見上げるタイプの作品ですけども、エントランスロビーの中二階に昇って見ていただきますと、100年が年表みたいに揃っているので、横からも見ていただければ嬉しいです。

今日は話を聞いていただきありがとうございました。駆け足でお話しましたので、分かりにくいところもあったかもしれませんが、一番伝えたいのは、「色」と、「きっかけ」のことで。私も東京を見ていなければ、そういうきっかけがなければ色を好きにならなかったのも、皆さんも、普段の身の回りの色や、熊本市の皆さんの住んでいる場所の色、町の中の色などを、ちょっとでも意識していただけますと、すごく嬉しいです。色は、人の心を動かしたり、人が自然に笑顔になったり、幸せになるきっかけとなることが多いと感じておりますので、これから意識してみてください。是非、熊本城ホールのインスタレーションを見ていただければ嬉しいです。ありがとうございました。

編集：富澤治子（熊本市現代美術館学芸事業班主査・学芸員）